

潮騒通信

潮騒ジョブトレーニングセンター

Drugs and Alcohol Addiction Rehabilitation Center

一部 100円

どっこい生きてます!



栗原豊センター長が9月25日、故郷のさいたま市で地元の人達を前に体験メッセージをすることができました。今では国内屈指のサッカー場埼玉スタジアムがそびえて発展著しい地域ですが、農業振興の網が掛けられて規制の強い農村部でもあります。昔からの強い絆とコミュニティが維持される中、故郷の人達がセンター長を温かく迎えてくれました。かつて壟盤を買った親戚や年老いた級友の顔もあり、懐かしく親交を深めることができました。時間の関係から短い話でしたが、センター長は「やってよかった」としみじみと語りました。(写真は栗原センターを支援する親戚の栗原透さん(左)と栗原宏さん(右)、関連記事=2,8~9ページ)

2016

9

一番手強い故郷で 体験メッセージができました



秋の深まりとともに夏場に蓄積した疲労が遅れて出る頃ですが、皆様お変わりありませんか。私の方は依存症の回復人生において、一つの節目となる出来事がありました。故郷のさいたま市で、地元の人達を前に体験メッセージをさせて頂いたのです。私はJリーグ浦和レッズの本拠地、埼玉スタジアムの近くで生まれ育ちました。当時は片田舎の寒村でしたが、今も親戚が暮らしており、私の支援者である従弟が今回、地元神社の祭礼での直会（なおらい＝神事後の宴会）の席で体験談を話せるよう尽力してくれました。私は早くから酒に溺れ、交番襲撃などで名を馳せた手の付けられないワルでしたから、周囲には迷惑の掛け通しでした。地元ではすっかり嫌われ者で、決して歓迎される存在ではないと思っていました。それが、まさか故郷で話ができるなんて…、もちろん故郷に錦を飾るなどおこがましく、ひたすら自分の回復の助けになるならと思い、恥をかきに行く覚悟で引き受けました。どうしようもないアル中、ヤク中の私でさえもこの程度には回復できる事を分かってほしかったのです。

一般に依存症、特に薬物依存症の回復にとって、故郷は「鬼門」とされます。消し難い過去の苦い思い出が随所に染みついており、昔のダーティーな人間関係がたやすく再発（スリップ）の誘因になるからです。それゆえ依存症の回復場所は、できるだけ故郷から遠く離れた無縁の地が望ましいとされます。もちろん迷惑を掛け続けた訳ですから、地元には何らかの形で償いや恩返しをすることが求められます。しかし、迷惑を受けた側からすれば「お前の顔など二度と見たくない」という生々しい否定感情が色濃く残っているでしょうから、私達アディクトはステップを通じてプログラムの中で罪深い過去の棚卸をすることが、地元への恩返しに通じると言えます。その意味で今回の故郷への“凱旋”は、私自身の回復が本物かどうか、最も深い所で試された得難い体験となりました。

ところで私は、今回の事で聖書に書かれた興味深い話を思い出しました。数年前、極道人生から転じてキリスト者として多くの元ヤクザを更生させている、同郷の進藤龍也牧師と対談する機会を得て以来、私は時折聖書に目を通すようになりました。信仰の書としての理解には至りませんが、聖書にイエスが故郷で説教する場面があります。イエスはあちこちで奇跡を起こし、救世主として押しも押されぬ存在となり、本来なら満を持して故郷への“凱旋”となるはずでした。ところが地元の聴衆からは「あいつは大工の息子じゃないか」「偉そうなことを言ってるけど、あいつの兄弟もみんな知ってるぞ」と言われます。結局は故郷では奇跡を起こせず、イエスが「預言者は故郷では容れられないものなんだ」「信心薄き者よ」と匙を投げた場面です。私は、ここに人間存在の奥深いリアリティーを見ます。今回、私のつたない体験談が地元の人達にどう受け止められたか分かりませんが、イエス・キリストにとってさえ、一番手強い故郷で話ができただけなことには感謝しかありません。

(センター長 栗原 豊)



今年も仲間50人がリカバリー・パレードに参加 雨にたたられながらも首都・新宿で回復をアピール

アルコールや薬物などの依存症者や心の病、生きづらさを抱える人たちが参加した第7回「リカバリー・パレード(回復の祭典)」が9月22日、東京・新宿で行われ、雨にもかかわらず大勢の仲間が祭日(秋分の日)で賑わう新宿駅周辺の目抜き通りを練り歩き、それぞれのスタイルで回復をアピールしました。潮騒JTCも趣旨に賛同して2010年の第1回から参加しており、実行委メンバーにも加わって盛り上げています。今年も潮騒エイサー隊がパレードの先頭を牽引し、雨に濡れながらも約50人の入寮者が「依存症は回復できる病気」などと訴え、パレードを通じて回復の喜びを分かち合いました。年々地方でも開催されるようになり、今年は横浜と関西が新たに加わり、全国7都市で開かれました。以下は中心メンバーとして頑張ったとむさんの感想ですー。

◇ ◇ ◇

今年7回目となる「リカバリーパレード」に行ってきました。これはウィリアム・L・ホワイト氏(依存症の治療や当事者運動の著名な米国の研究者)の提唱で始まったアクティブなプログラムです。実は私自身も東京の施設にいるとき、ビックブックファミリーの仲間が熱心に取り組んでいる様子を垣間見ていました。でも、なかなか自分の欠点を見つめられず、何となく生きづらさを感じていながら

も自身の病気を知らな過ぎた自分は、楽しそうにしている仲間を羨ましく思いつつもどうしたらいいのかわからず、クールなふりをしていたことを思い出します。

施設につながりながらもスリップし、どうにもならなくなっていた自分は6年前に潮騒に辿り着いたのです。スポンサーとの連絡も途切れ、施設の中の人間関係で苦しんでいた時に、この「リカパレ」があり、仲間との再会がありました。そうして今へと続くプログラムに戻っていくきっかけの場所でした。

あれからずいぶんと時間が経ちました。今も変わらずパレードに参加する仲間あり、亡くなっていく仲間あり、姿を見なくなってしまう仲間もいます。けれどセンター長が提案する「病気と向き合うことから逃げなければ回復はある」という思いは本当です。開催日当日は、朝早くから弁当詰めをしてくれる仲間、出発準備をするため駆けずり回るスタッフ、皆が様々な役割をこなしながら実現できたものです。

今年是一回目の時のように大雨に降られました。けれども今回、そこには仲間の愛があったと思います。一人では回復できないけれど仲間と一緒になら可能だということ。改めて、その事に気づかされました。原点に返ってまた明日からのプログラムに取り組んでいきます。(潮騒のとむ)



潮騒 JTC 関連施設の女性ハウス「るみの家」は9月18日、初めての家族交流会を開きました。当日は入寮者の家族の方が併設の作業所「ひだまり」に集まり、自己紹介と近況報告、相談、そして女性メンバーが作った昼食で楽しく全員が顔合わせして、いろんな話で盛り上がりました。

入寮者の中には、家族や親子の線が切れて何年也会えなかった人や見放されていた家族との再会があったり、施設を退寮しても繋がっている仲間とその家族も参加して下さり、一緒に生活している悩みや不安な事、大変な事などを忌憚なく話していただきました。男性施設のジョブトレ家族会に繋がっている女性メンバーの家族のお話に励まされたり、初めて顔合わせする家族の方がサポートしてくださったりと、家族間での深い分かち合いができました。

とりわけ近況報告の時の娘さんの話には皆涙を流し、私にとっても良い一日になりました。ここ1カ月の間に数名の仲間が“脱走”して施設を出て行ってしまい、いろんな事があり過ぎて私の調子が少々ダウン気味になっていたところだったので、家族交流会でお会いできた方々や仲間の喜ぶお孫さんが来たりと、予想を超える熱い感動場面や改めて感じた家族の絆の確かさに心が癒されました。

交流会の約1カ月前からメニューを考えたり、家族にあげるクラフトテープでのプレゼントを作ったりと、いろいろ思いを募らせて準備を進めましたが、そうした苦勞が実ったと思っています。都合により家族に会えな

かった仲間達も、自分の事のようにお料理のお手伝いをしてくれて、メンバー全員が素晴らしい「ギフト」を得ました。交流会の前日は施設近くの公園で開かれたお祭りに参加し、夜には施設の屋上で花火大会の花火を観ながらミーティングをしたりと、有意義な日々を過ごしました。まさしくハイパーパワーからの贈り物をいただきました。1年に1回ぐらいのペースで、今後も交流会を開きたいと考えています。責任者である私自身も次回を楽しみにしています。(施設長 栗原ルミ)

マコ

4カ月ぶりの再会で心の中の何かがスーッと溶けた

思わず走り出し、娘と姉を乗せた車の見送りに手を何度も何度も振り続けました。バックミラーで娘は気付いたのか、ハザードランプで合図をしてくれました。その瞬間、抑えていた感情が噴き出して大粒の涙がポロポロ流れ出し、娘を姉を乗せた車は見えなくなりました。家族会が終わり、各々の家族だけの時間をつくって頂けた設定の最後のシーンの事です。素晴らしい企画をして頂いた事、センター長、施設長に感謝の思いでいっぱいです。娘も姉も私の知らないところで、たくさん皆さんに話を聞いてもらい、胸の内を吐き出せたんじゃないかと思います。愛し合う家族が、離れ離れに暮らす事になり、きずなも失ってしまいました。けれど4カ月ぶりの再会で、心の中の何かがお互いスーッと溶けた気がしました。最高のひと時を過ごさせて頂き、誠に有難うございました。

れいこ

うれしい出来事を目の当たりにできたステキな一日

9月18日に家族会が行われ、仲間のご家族の方とお会いする事ができました。これまでアルコールや薬によって家族と疎遠だった仲間が、お姉さんにも会えるなんて…。今日はうれしい出来事を目の当たりにでき、本当にステキな一日でした。私もいつか家族と笑顔で会える日を…。おいしいアップルパイ三段巻をごちそうさまでした。

ゆうこ

仲間の笑顔をたくさん見れて私も幸せな気分

初めての家族会に参加してすごく緊張したけど、仲間の笑顔をたくさん見れて、私も幸せな気分になりました。みんな協力して作ったご飯もすごくおいしくて、私も子供達に会えるようになったら、子供達に作ってあげたいし、毎日お祈りを続けて、会える日を信じて回復して待っていたいです。

←— なあな —→

家族に会えなかったけど幸せを感じられた一日だった

朝から皆、緊張した顔付きでした。私の家族は都合により来ませんでした。理由は、私のせいで母がパニック障害にかかってしまったため、一人でバスに乗れないからです。私は今更ながらに自分を責めました。が、施設長の計らいで電話をさせてもらえました。顔は見なくても久々に聞く母の声…。とても安心と勇気をもらえました。母は私に「行けなくてごめんね」と謝ってくれましたが、来る途中にパニックが起きたら怖いので「大丈夫だよ。ママのせいじゃないよ」と言いました。本当は会いたくて会いたくてたまりませんでした。約20分の電話で心がとても穏やかになった自分がいました。他の仲間達はいつもの顔と違い、母の顔になったり、子供の顔になったり、おばあちゃんの顔になったり…。とても微笑ましかったです。私は家族に会えなかったけど、とても幸せを感じられた一日でした。

←— イルカ —→

今回の家族会に来てくれてお母さん本当にありがとう

9月18日に家族交流会があつて、まさか来てくれるとは思っていなかったお母さんが来てくれました。本当に、昔はクスリを買うためにお金をさんざん引っ張れるだけ引っ張って、挙句にサラ金で借りてまでお金を引っ張っていました。だから私が病院に入院した時に、お金とたばこと洗濯洗剤を持って来てもらうために電話をしたら、「いいかげんにしてくれ!」「私は私の生活があるのよ」と言われました。でもお母さんは、次の日には病院に来てくれて、「これで最後にしてくれ」と言われました。翌日お礼の電話を入れたら、「そんなことどうでもいいから、二度と電話して来ないで」と。それからずーっと会う事はありませんでした。それが施設の配慮で二度も会う事ができました。笑って会って、話ができるようになって、とても感謝しています。11月のフォーラムにも来てくれるそうです。このままい親子関係でいられたらいいなと思っています。本当に今回の家族会に来てくれて、お母さん、ありがとう。

←— めい —→

産み育ててくれた両親に心から感謝できる自分がいる

ひだまり作業所で開かれた交流会。4名の仲間の家族の方が集まりました。私の家は両親が来てくれ、5カ月ぶりに笑顔を見ることができました。皆、それぞれいろいろな想いだったと思います。まさか来てくれるとは…という家族に会えた仲間もいました。初めて抱く孫を大切な宝のような目で見ていた仲間には心打たれました。私の両親は、

私と向き合う事が辛かったと思います。ここに繋がった1年2カ月前は、やつれ、顔も切なげでした。そうさせたのも私。この1年2カ月間が無駄ではなかったと想えたのは、両親の強く朗らかな表情でした。「自分なりのペースで」をいつも言ってくれる両親。そして何より産み育ててくれた両親に、今やっと心から感謝できる自分がいます。こうなれるには時間が掛かりました。仲間がいるから、やっていけます。こんなステキな日を与えてくれて、ありがとうございました。

←— みく —→

回復に向かって頑張っている自分に神様のご褒美を

9月18日(日)に、るみの家で家族交流会がありました。私は施設長のルミさんから「娘さんにラインを送ったけど返事が来ないから、家族会には来ないね」と言われていたので諦めていました。が、なんと前日の夕方に「行ってもいいですか」と連絡があつたそうで、夕食の時にその事を告げられ、もうビックリ。最後の最後でのどんでん返しに仲間とハグしました。泣いている仲間もいて、私も涙が止まらず、あんなに苦しませ、悩ませ、つらい思いをさせてきた娘が、しかも2歳の男の子と生後半年の女の子の二人も一緒に連れてくるというのです。私は娘に会うのが2年半ぶり、孫は初めて会います。

会った時は遠い所に来てくれてありがとうと挨拶をし、孫二人にも「おばあちゃんですよ」って抱きしめて、抱き上げて6カ月の孫の体の重み、温もりを本当に肌で感じました。いろいろ話しましたが、私は娘が来てくれたこと、これがハイパーパワーの力なのか、今、回復に向かって頑張っている自分に神様のご褒美を与えてくれたのかと実感しています。帰り際に娘が「こういう機会があつたら、また来るネ!」と笑顔で言ってくれた言葉に、本当に感謝しています。また会える日まで私もクリーンを、そして娘と二人の孫に体に気を付けて元気でいてくださいと、毎日お祈りをするつもりです。



第9回「戦後のひもじい時代に育った社会環境がバネに」

ユタカ vs トム 対談



—— 前は潮騒の名称変更問題を取り上げました。結果オーライではありませんが、この英断がジョブトレーニングセンターとして潮騒が名実ともに就労支援に特化していく流れをつくっていくことになった訳ですね。栗原センター長にとっては正に大きな賭けで、どこもなし得なかったダルクの「出口問題」に、独自のスタイルで風穴を開ける事に繋がっていきます。振り返って、不可能を可能にしたのは何が良かったと考えていますか？(司会進行・広報部)

得体の知れない怪しい連中だから 反対された

ユタカ 一番大きかったのは少しずつ味方が増えたことだね。独立したものの孤立無援で銀行の信用などないから、施設用のアパートを借りるのさえ苦勞した。そんな風だから初期の苦しい時代には、あわよくば潮騒を利用しようという計算高い意図を持った連中ばかりが近づいてきた。騙されかけたこともあったけど、こっちは失うものないから怖い者なしだよ。とにかく無我夢中で突っ走った。それをハイヤーパワーが見てくれていて、いい方向へと導いてくれた。

—— 具体的にはどんな形で支援の輪が広がったんですか？

ユタカ 前にも触れたけど、ミーティングそっちのけで仕事(当時はアルバイト)に出ていれば回復に繋がると甘く考えていたから、当然ながらスリップの続出で施設が危機に瀕した。それで原点に戻り、ミーティングに力点を置いた施設運営を辛抱強く続けた結果、次第に信頼が高まり、病院などから繋がる入寮者が増えて来た。すると施設が手狭になる。当然ながら施設を増やすには、地域の人達の理解と支援が必要だよ。でも地元の人達からすればヤク中ア

ル中は訳の分からない、得体の知れない怪しい連中だから、当然ながら進出に反対された。そこで仲介者として、主に潮騒が活動する上で付き合いのある地元業者さんに尽力してもらった訳です。そうして時間を掛けて私達を理解してもらうという作戦で、少しずつ地域に仲間入りしていった訳です。

—— ボランティア活動にも力をいれたんですね。

ユタカ そうですね、地域に理解者を増やしたかったからボランティア活動には積極的に取り組みました。新たに進出した銚田市側にある鹿嶋市郊外の農村部は、意外と都会から移り住んだ人達が多いんです。定年退職して第二の人生に田舎暮らしを求めてね。そうした人達は高齢者だから、家の補修やペンキの塗り替え、除草作業などをボランティアの利屋仕事として引き受けた。これがよかった。今ではもっと発展した形で高齢者宅の見守りや支援者ネットワークに繋がるように組織的に取り組んでいますけど…。

孤立無援の中で 自力で道を切り開くしかなかった

—— 他のダルクを見るとキリスト教会の熱い支援や更生保護団体などが下地を作ってダルクを誘致する形が多いように思いますが…。

ユタカ 今言ったように時間はかかったけど地元で支援者が一人、二人と増えてきた。でも、ほかのダルクのように、宗教関係者らの熱い支援の下地など地元にはほとんどなかったし、地元の家族や支援者らが施設の設立をバックアップするという強力な、厚みのある下支えも期待できなかった。やはり自力で道を切り開くしかなかったですね。もっとも、この逆境が私のヤル気に火を付けた面は否定できません。何くそーって感じでね、不思議とパワー

が湧いて来るんです。

——その後の展開はどうになりました。

ユタカ そんな中でも私の事を理解してくれる少数の人達が、施設向きの中古物件を紹介してくれたり、理解ある市議会議員さんが行政への橋渡しをしてくるようになったんです。

——でも、それだけなら各地のダルクと同じで支援者頼りというか、支援者におんぶにだっこの、よくある支援構造を抜け切れません。困った時の家族支援、献金頼りという、従来からのダルク運営スタイルに落ち着いてしまいますよね。センター長の場合は自力更生、自助努力と当事者の頑張りで困難な状況に耐えてきた。そこのエネルギーの根源のところなんですけど…。

引く手あまただった “人夫出し”の仕事に目を付けた

ユタカ うーん、どうなんでしょうね。振り返って思うのは、やはり私が戦後の貧しく、ひもじい時代に育ったという当時の社会環境が大きいと思います。肉親の愛情に飢えていたのと、腹いっぱいものを食いたいという思い。精神と肉体の飢餓感が私の人生の根本にあるんですね。これが他のダルクの人達と違うんでしょうね。とにかく「食う」ためには、どんな形であれ働くしかなかった。もちろん悪さも半端じゃなかったけどね。後に任侠道の世界に飛び込んだものの、いわゆるシノギだけでは食えないから、社会の片隅において自力で「食う」構造を模索するしかなかった。そのために私なりに知恵を絞って、資金も人脈も信用もないヤクザの身分で何かできるかを考えた。

——若い頃は事業家としても一時期成功したと聞いてますが…。

ユタカ そんな大げさなもんじゃないよ。私が2、30代の頃は折から日本は高度経済成長に向かっていて突進していました。あちこちで建設ラッシュの時代で、やがて田中角栄の日本列島改造の嵐が吹き荒れて、土建国家がつくられていく。私の活動拠点は埼玉で、空前の繁栄に向かう首都・東京に近接しており、これまた地の利があった。そこで、まだ若かったけれど、土建業の日雇い仕事で引く手あまただった“人夫出し”の仕事に目を付けました。猫の手も借りたいような労働者の売り手市場だったから、怖い者知らずで、今でいう労働者の派遣みたいな事業を始めたんです。そしたら私の下に、同じように社会や地域から弾かれて行き場を失った幅広い世代の人達が自然と集まってきた。

若造の私にリーダーシップがあったとは思わないけど、

上から目線じゃなくと一緒に泥を被る姿勢が共感を得たのかもしれないね。結構、人数が増えて来て、とにかく私も現場に出て一緒に汗を流した。建設現場の単純な肉体労働だから、これといって技術も経験も必要ない。情熱とマンパワーが力となって生きる世界。これが予想以上に繁盛した。もっとも上手くいきすぎて、その後には勢い余ってクスリに手を出して身を亡ぼす訳ですが…。

施設の特長を生かす 就労の在り方を模索すべき

トム 今の話には既に潮騒のジョブトレの原型を感じますね。まず汗を流すことをいとわない。それと仲間意識の醸成と、自分達の手で居場所作りをする。これにミーティングが加われば、そのままダルクの原型に繋がるし、今取り組んでいる潮騒の就労支援活動にも繋がりますね。それに潮騒が成長している要因には、ユタカさんの人間関係をいとわない姿勢が大きい、と僕は思ってます。肩書きとか地位とか関係なく、どんどん相手の懐に飛び込んで関係の輪を広げる破天荒なパワー、かな(笑)。

ユタカ もう半世紀近く前ですが、あの頃は依存症なんという言葉はなく、仕事を終えての一杯が明日への活力という時代でした。今とは違って世の中がお酒に寛容で、酒は仕事の潤滑油。覚醒剤だつてうまく使えばこんな強力な味方はない。タクシーや長距離トラックの運転手らには必要なアイテム、不可欠な必要悪だったですよ。もっとも、そこが依存症の落とし穴。うまくコントロールしているつもりが、いつの間にかクスリに支配されている。気が付いたらやめられない依存症に陥っている。

トム どうなんでしょうか。視線を変えてみると、依存症の世界で取り組む就労支援問題なんですけど、もとより世間一般と張り合うことは無理ですよ。どうしたって世間とは太刀打ちできない。大事なことは依存症という特殊な病気を踏まえた上で、施設の特長を生かす就労のカタチを模索すべきだと考えています。発想の転換ですね。幸い潮騒には他にはないマンパワーがある。しかも過去の多様な職歴を否定するのではなく、これをうまく活かせばいろんな分野にチャレンジできる。実際、潮騒では土木建築、造園、塗装、内装、飲食…、今では高齢者介護事業まで手を広げているでしょう。これが出来るのは何といってもユタカさんにマネジメント力があるからです。座しているより動くことをいとわない行動力、みんなを動かす技術。

——とても興味ある指摘ですが、すいません紙面の関係で続きは次回にお願いします。(この項続く)



▲様変わりした実家の風景にあって、今も変わらずに残る井戸の前に立つ栗原センター長

生まれ故郷で話ができ 本当によかった

栗原センター長、故郷メッセージで自分の生き様を語る

今月号の表紙写真や2ページの随想でも触れているように、栗原豊センター長が悲願だった故郷メッセージを実現しました。地元のさいたま市緑区寺山地区で開かれた天神社例大祭の直会の席に、若手国会議員や地元市議らとともにゲストとして招かれたものです。ほんの短い講話でしたが、栗原センター長は「やはり地元は格別。生まれ故郷で話ができ本当によかった。昔の懐かしい友達にも会えたり、代替わりしたとはいえ、多くの人から励ましを受けて感動した」と語りました。

この日は広報部メンバーも故郷取材を兼ねて同行しました。今ではサッカースタジアムが出来て次々道路が新設されるなど、すっかり風景が様変わりしたものの、栗原センター長は地元集落の生家付近を散策し、その風景を懐かしく目に焼き付けていました。実家のあった場所には栗原家の個人墓があり、井戸も昔のまま残っていました。また本家や養家の入口にも足を延ばし、子供時代に思いを馳せていました。直会は地元の自治会館で夕刻から始まり、マジックショーなどを楽しみ

ながら、栗原センター長は地元の人達と和やかに懇談しました。以下はこの日、故郷で述べたセンター長のメッセージ概要です。

◇ ◇ ◇

私は少年時代から地元ではワルとして知られ、酒に問題を抱えていた。これが不幸の始まりで、17歳の時には酔った勢いで交番襲撃事件を起こし、鑑別所送りとなった。地元には多大な迷惑かけたが、村の人達には嘆願書を書いてもらい、助けられた。その恩に報いることもせず、私はどんどん悪の道に突き進んだ。成人になると、ヤクザの道に入り覚醒剤にも手を出した。全てクスリ(覚醒剤)とアルコール絡みの事件で、合計7回通算20年に及ぶ刑務所暮らしを経験した。背景には、自分の生き方を間違えたことがある。任侠道の世界には、自分の力が認められる素晴らしいものがある、親分子分の固い契りは家族の絆を超える、と錯覚した。自分も親分になる気概で、より強い存在になろうとして、虚構の世界をさ迷った。しかし、結局は強さを補うはずの覚醒剤とアルコールで

身を持ち崩した。

そんな私も親戚の尽力で人並みに結婚して二子を設けたが、2度目の刑務所入りで家族は私の元を去った。このように薬物やアルコールに溺れると、やがては一人ぼっちになり、大事なものの全てを失う。私が運営する施設には、そういう連中ばかりが集まっている。私もままならない生活の中で「なんでこうなるんだろう」と悩み続けた。塀の中にいれば欲求は止まっているのに、一歩外に出るとクスリを使いたくて、アルコールを飲みたくて、どうにもならない…。やがてダルクという薬物依存症のリハビリ施設との出会いによって、それが依存症という病気に起因すると気づかされた。そうなるのに私は60歳までかかってしまった。

ダルクに助けられた私は同じように依存症に苦しむ仲間の手助けをしようと、自分の施設をつくった。それが茨城県鹿嶋市にある潮騒ジョブトレーニングセンターだ。当初4、5人だったものが、今では女性施設も含め約130人が入寮生活を送っている。どうにもならなかった私でさえも回復できたのだから、私の施設はどんなに大変な人でも受け入れている。これが最大の特長だろう。回復したいという気持ちがあるなら、どんな人も受け入れている。

私の人生はとても世間に顔向けできるものではない。アルコールも薬物もギャンブルも、そしてヤクザ組織の中でも、たいがいのは経験してきたつもりだから、私に助けを求めてくる人達にはある程度は力になれると自負する。10年を超える施設運営経験から、それくらいには回復し成長しているつもりだ。既にダルクができて30年、全国に約70カ所の関連施設ができた。しかし、依存症者はますます多様化や高齢化、重複障害化、生活保護頼りの傾向が加速し、どんどん回復が難しくなっている。このため、どんな重い人でも受け入れるというダルクの原点が危うくなり、ダルクも回復しやすい依存症者を選んで受け入れる傾向の流れになっている。

だからこそ、私の施設では人を選ばずにどんな人でも受け入れ続けたい。何しろ故郷ではどうしようもない存在だった私が回復できたのだから、これからも大変な、行き場のない人達の居場所となっていきたいのだ。自慢する訳ではないが、これまでの施設運営の苦勞が報われて、私のような者でも少しはいい車に乗ろうと思えば乗れるぐらいの身分にはなった。でも、そのお金があるなら、依存症で苦しんでいながら行き場が無くて今、困っている家族を、当事者を救いたい。助けを待っている人達のために、一つでも多く受け皿となる施設をつくりたい。

潮騒が今後どこまで大きくなり、どこまで膨らんでいくのか分からないが、支援者や地元の人達、行政などの理解と支援を得ながら、自分達の手で自分達の居場所づくりを、新たなイメージで進めている。いつも再発の危険を抱えているので、私達には人並みの幸福の実現は難しい。そのため「半就労半福祉」という中間支援の形がちょうどいい。自分達の頑張りでも最低限「食える」地域完結型の総合的な依存症回復施設を、この鹿嶋地域につくろうとしている。それが、私が妄想として描く「潮騒アディクションビレッジ(=依存症村)」構想です。道は険しいとしても、妄想の実現に向かって努力していきます。もし私の故郷に依存症で困っている人がいたら声を掛けてください。すぐに助けに駆け付けます。どうか今後もご支援を宜しくお願いします。(文責&構成・広報部)



▲直会会場の前でセンター長を挟んで並ぶ広報部のティジさん(左)とユウキさん(右)



▲かつての実家裏にある栗原家一族の個人墓に立つ栗原センター長



▲苦い思い出が染み付いた養家前で感慨不可気な栗原センター長

受刑者からの手紙

期待した 8 月 11 日の「山の日」にお菓子は出なかった

今は一般工場から転業し、新しい工場で暑さにも負けず、また覚え直す事が沢山有りながらも一から直す気持ちで頑張っております。最近、台風が異常な程多いですが、そちらは自然災害等は大丈夫でしょうか？ 北海道内の各地では土砂災害や河川の増水などで農家が大変なようです。手塩に掛けて育てた農作物が大きな打撃を受け、被害が広がっています。当所においても断水・浸水を余儀なくされ、台風の通り過ぎた後の片付けに追われ、本来の刑務所作業とは別の作業をしています。

話は少しそれますが、国民の祝日として「山の日」というものが加わりましね。懲役の楽しみといえば食べる事しかないと思います。8月11日は「山の日」でしたが、残念なことにお菓子が出ませんでした。他の施設でも出ていないのでしょうか？ 少し気になります。そして9月初旬には運動会が行われる予定です。その際にもお菓子が出ないような話ですが…。もし本当にそうなら、お菓子の出ない運動会など開催されても、あまり意味がないように思います。8月に入り各工場ではケンカなどのトラブルで調査対象になる人が増えているようです。お菓子が出ないことが原因なのかはわかりませんが(笑)。これだけ書いて外に発信すれば、きっと運動会そしてこの先の祝日には食べ応えのあるお菓子が出ると思います(笑)。

ところで清原の覚醒剤事件に続き、高知東生(たかち・のぼる)までもが逮捕され、判決の行方が気になります。執行猶予かそれとも実刑なのか…、まあ所持している量が少し多いように思います。私が判事なら初犯とはいえ実刑です。仮に本人が薬をやめるつもりがないのなら、執行猶予はもらわないで務めた方がいいと思います。やめるつもりでいても手を出してしまうのです。それが薬物依存の怖いところでもあり、病気なのです。自分では余り自覚のない病気なので私も困っています。社会復帰後よろしくお願い申し上げます。

(神奈川県 O・T)

私もいつかは自分の足で立ち、自分の道を行きたい

先日ある本を読んでいたら、「『人』と言う字の本当の意味はね、人間が足を広げて独りで立って居る姿なのだよ。人って云うのは自分で立つ者なのだよ。誰かともたれ合っているのではないのです。だから、皆自分の道を行くしかないのだよ！」とあったのです。皆さんもそうかもしれませんが、私は子供の頃から「『人』と言う字は人が支え合って生きているのだよ」と教えられて来たものですから、カルチャーショックを受けてしまいましたが、「…だからこそ、皆自分の道を行くしかないのだ！」と書かれてある個所に凄く感銘を受けました。

私もいつかは自分の足で立ち、自分の道を行きたいと思います。それと同時に他の人達と助け合って生きていきたいと思っています。その為にはこれから先、色々相談をさせて頂く事も有るかと思いますが、その際は宜しくお願い致します。そしてたった今、栗原センター長よりフジさん代筆にてのお手紙が私のもとへ届きました。有難う御座います。お手紙の中で“某有名人の事、そして病気の事より再犯の事ばかりをメディアは追いかけている”と有りました。私もそれは嫌になります。世の中が病気(依存症)について無知いいう事もあるかもしれませんが、もっと本質的なモノを見て欲しいです。

薬物使用を繰り返さない為にはどうすればいいのか、という所をもっともっと考えて欲しいし、依存症を理解して欲しいのです。他の人が再犯するのも、私自身が再犯するのも、考えたくもないというのが本当の所なのですが、逃げてばかりもいられないのでしょうね。本当に依存症は苦しいものです。私は先々、依存症を世の中に理解して頂ける様な活動をしていこう、と考えて居ます。そうする事が私自身の回復に繋がるだろうと考えても居ます。それだけに潮騒ジョブの存在は、私にとって凄く大きく有難いです。

(長崎県 K・I)

今回の手紙の中に、人という字は人と人が支え合っているのではなく、自分の足で大地にしっかり立っていることを意味するという指摘があります。それで思い出す詩があるので紹介します。「ぼくの孤独はほとんど極限に耐えられる／ぼくの肉体はほとんど苛酷に耐えられる／ぼくがたおれたらひとつの直接性がたおれる／もたれあうことをきらった反抗がたおれる」(吉本隆明「ちいさな群への挨拶」)。受刑者の皆さん、自立に向け頑張りましょう。

単調な生活を送る中で 出所後の潮騒での生活が心配

自分が覚醒剤を止めたいと言う気持ちは本当なので、栗原さん初め、潮騒ジョブのスタッフの方々の指導の下で、回復へ向けて頑張りたいと願っております。とにかくにも、まずは社会復帰を目標に日々を重ねて居ます。

ここの単調な生活を送る中で出所後の生活、特に「潮騒ジョブでの生活がどのような感じなのか」という所が心配であり、不安です。しかし、同封して頂いた「どっこい生きてます!」を読ませていただき、日々どのような活動や、どのような仲間が居るのかを、ほんの一部だとは思いますが知ることが出来、「安心」と言う言葉が正しいのか分かりませんが、気持ちが楽になり、他にはどんな活動をしているのか、と興味が出て来ました。是非、また送って下さい。

私の方は、こちらの生活にも作業にも慣れて来て、周りの同囚に迷惑を掛けずに生活が出来るようになりました。私は身体だけは元気で頑張っ居ますので、栗原先生もお身体等くれぐれもご自愛にて送日して下さい。(神奈川県 N・Y)

読んで下されば 私は誰に読んでいただいてもいい

都会の下町で育った私にはやはり関東の空気が一番、肌に合っています。手紙には、スタッフの人達が誰彼の担当ではなく、手紙を読んだ人が返事を書く事になっているのがルールとなっているのでしょうか。そう私は思いました。今までフジさん(アノニマスネーム)という方よりの心温かいお手紙を頂きとても嬉しく感謝の気持ちです。私の手紙はもちろんの事、栗原代表も読まれている事と思います。

読んで下されば私は誰に読んでいただいてもいいのです。少しでも私を知って頂ければと思って居ます。お便りと潮騒通信を読ませて頂き、皆様方が生き生きしている姿に感じ入って居ます。皆さんが仲良く生活している様子が伝わって来ました。私も回復に一步でも近づく事が出来る様に皆様方のご指導の程、宜しくお願い致します。

(東京都 S・Y)

準備ホームより生活保護に頼りたいがどうか？

以前に栗原センター長よりの手紙に、潮騒ジョブにはクリニックがついている旨の事が書いてありましたが、精神科の通院は大丈夫でしょうか？ 私には所持金がありませんがどうするのでしょうか。以前は殆どの方が生活保護で生活しているような事が認められてたとの事ですが、今は観察所の“出所者の自立準備ホーム”なるものを活用している事もセンター長の手紙に書かれてありました。準備ホームでは医者にかかるのには自腹だという事も“フジさん”よりの手紙にありました。その一方で生活保護では医者は無料でやってくれと聞きました。

私としては、お金が掛からないのなら準備ホームより生活保護に頼りたいのですがいかがなものでしょうか。精神科にも歯科にも通いたいのですが、いかがなものでしょうか。その点、回答願います。面倒臭い者ですが、薬物依存からの回復をすると言う気持ちは強く心に誓って居ます。

私の残刑も一年半を切りました。以前の手紙に“私は対人関係(集団生活)がうまくいかない”として出役拒否を繰り返して独居生活を続けて居ます。いつかは“区切りを付けなきゃいけない”とは思っているのですが…。潮騒ジョブでも対人関係はついてまわるもの、社会においても同じ事で、他に関わらず生きて行く事は出来ない事も分ります。残りの一年半で少しでも対人関係を築けるように頑張っていきたいと思って居ます。

(神奈川県 T・U)

しおさい俳壇

9 月のお題

月

選者 桐本石見

わが俳句人生の歩み・No.32

センター長 栗原 豊

話は前後するが、これまで述べているように私を回復の道へと導いたのは親族である姪の存在です。彼女はいち早く自助グループに繋がり、仲間の中で回復していました。7 度目の服役の時に姪との手紙のやり取りがなかったら、回復者として今の私はこの世にはいないだろう。それだけに深い恩義を感じている。今回は姪とのやり取りを過去の私の手紙で振り返ってみる。

手紙ありがとう。文面から君が病気（依存症）で大変な思いをしていたことを初めて知りました。ヤク中でアル中という不名誉な立場の叔父である私が言うのも変ですが、依存症を絶ち切るのは本当に大変なことだと実感しています。世間には顔向けできない依存症の先輩当事者として、自分自身の体験から切実にそう思います。塙の中はともかく、これまで娑婆に居るときにはアルコールやクスリ（覚醒剤）をやめていく自信がからつきし持てませんでした。今では遠い過去の話になりますが、大阪にいた時の 5 年間はクスリを止めていたのが不思議なくらいです。その頃はヤクザとして立派？に成長していくという目的があったからかもしれません。周りに居た若い者の中にはクスリをやっていたのがいたけれど、それを見てもやる気が起きなかった。結構、意志は強い方で、負けず嫌いも相当なものです。クスリにも、負けるのが嫌で深みに嵌ったのかもしれませんがね。昔はいくらやってもボケることはなかったのに、最近では 1、2 回でも幻聴が出て、すぐボケてしまいます。簡単に自分が自分でなくなってしまうので、本当に怖いです。そんなふうに自覚できるのも、君との手紙を通してです。今度こそいい機会なので止めたいです。

今私は独りぼっちなのでとても寂しいです。なので、君がここに面会に来てくれたことは、大変な励ましになっています。こうして手紙をもらえて嬉しい限りです。私にもよき理解者となる親戚の身内がいたんだなあとと思うと、前向きに生きる勇気が湧いてきます。この病気は当事者でないと、その怖さが分かりにくい面があり、社会ではなかなか理解者が増えないようです。それどころか同じ人間なのに、まるで異人種を見るように差別的に扱われます。そういう辛い経験をしてきたので、こんな近くに私の理解者がいたなんて奇跡です。立ち直った君はもう大丈夫と思いますが、この先もどうか頑張り通してください。君の頑張っている姿を思うと、塙の中にいるダメな叔父だけれど、私にも大きな励みになっています。

天に干す綱の囚服雲の峰 | 虫のこゑ尊徳像に灯の暮らし

満月に
潮も満ちたる
下津浜

みく

原句は少し変えましたが、これで煌々（こうこう）とした秋の満月に潮も満ちた下津の浜の景が目につくふ詠になります。夏は海水浴で賑わう浜も静かな秋を迎えて青波や荒波が寄せますが、その沖に上がる月も雄大な眺めです。

特選句

稲刈りを
終えて見上ぐる
利根の月

コバ

利根川は群馬県三国山脈を水源に約三百キロ余りを流れ、銚子の太平洋に注ぐその間に水資源や多くの田畑を潤わせる。その利根沿いの稲刈りも終えて夕月を眺めるのは、心も安らぐ大景の句です。

特選句

何もなき
故郷なれども
月明り

あべ

作者の故郷は何処だろうか、取り立てて観光や史跡もないが山か海の里を秋の月が照らす。例えば高知の桂浜などは観月で賑わうが、この詠の様な景は今では過疎化の地に多く見られます。私の山国の郷を偲ぶ句でもあります。

特選句

今月の秀逸句

約束を

破りて月を
見ないふり

ゆうこ

月見の約束か、逢う約束かも。夕べになり月も明るい、約束を違えたので後ろめたさもあり、月も見ないで少しの後悔も思う面白い句です。

何となく

辛き今宵や
月を見る

めい

人の毎日は常の事を繰り返すのが多いが、時に辛い事や嬉しい事がある。夕べに一人月を眺めるのも心を癒すし、嬉しい時は更に心躍らせる。しみじみした句です。

弟を

かばう姉みて
月の道

あべ

叱られたか、喧嘩したのか、夕暮の道を姉に連れられて帰る微笑ましい景。今では田舎の日暮は子供も余り見掛けがないが、祭りの夜などの昔を偲ぶ句で懐かしい。

世界がね

繫がつている
月を見て

かこ

月見するのは中国や日本などアジア諸

国が多いと言われるが、西欧もアメリカも収穫祭としてあるとも。同じ月を見て人類は繋がりもあるが戦もある。諸々の思いの句です。

何時見ても

いいもんだよね
三日月夜

まさる

月齢は三十日をかけて変化し夫々に趣があります。三日月は眉月、纖月(先せんげつ)などとも言ひ兜の飾りや旅館の名にも使われる。一般には満月に月見をしますが、他の月も美しい。

月明り

昔の恋を
語りけり

あお

これは男同士の酒席の詠かも、或いは月明りの散歩か、二人で初恋や大人の恋の話をする、遂げぬ恋、成就の恋夫々に昔を偲ぶ。月明りも句に相応しく切ない。

爺婆の

薄茶汲み合ふ
月夜かな

ゆたか

若い時は有名な所の月を見に車で遠出するのも楽しい。例えば、犬吠埼、五浦海岸など。しかし歳を重ねると、家の縁側から茶でも飲みながらの月見も良い。老夫婦の微笑ましい句。

佳作

うすら日の月ぞと思ふ日暮かな	なあな
月を見て犬の遠声帰り道	みく
行く道の心細けり月明り	れいこ
満月や今も子の日の兎かな	いるか
まん丸の月がきれいだ下津浜	あみ
鏡月吾子に会いたや涙する	まこ
お月見の団子気になる子供達	ひろ
乾杯の手酌ながらも月見酒	しげ
月明けや門を閉ざせる武家屋敷	あべ

齡経て月の魅力に見とれぬる	まさる
満月に雲のかかりて非恋かな	あお
月明り一人下津の散歩かな	もと
筑波野や月に芒がよく似合ふ	こば
更けてなほ月下美人に月光る	そら
盆の月この夜はどこも水流れ	いち
朝焼けの一つ咲く花月の色	かーと
上弦の月を見上げて千鳥足	ひろ
満月に出でて閑や北浦和	ゆたか

どっこい私も生きてます～我が回復記～「トンちゃんの回復記」

第7回

自分は潮騒で人生の“生き直し”ができています

原発事故に伴う福島での除染作業で経験したヤクザ絡みの理不尽な仕打ちで、肉体的にも精神的にもすっかり疲弊した自分だったが、「自分の人生なのにどうして上手くいかないのだろう」「利用されてばかりで自分には人を見る目がないのか…」と悩み続けた。福島から戻ったものの、もはやお手上げ状態の自分には行く当てもなかった。気が付くと、いつの間にか故郷に足が向いていた。しかし、既に生家は人手に渡り、敷地に踏み入れれば不法侵入になっていた。

ホームレスよろしく、ままならない自分の人生を恨み、最後はアルコールに逃げることで現実逃避した。そうした生きる屍のような自分にも、捨てる神あれば拾う神ありだった。そんな窮状を見かねたある福祉団体が救いの手を差し伸べて、再び生活保護を受給できた。そうして自分は3年前の11月に潮騒JTCに繋がった。以前にも役所の紹介で施設は経験しているが、潮騒はこれまでとはまったく違っていった。依存症の回復支援に加え、潮騒独自の就労支援活動が自分に再生のチャンスを与えてくれている。

もはや自分には肉親とよべる存在は、都内に住む姉一人だけ。ときおり別れた妻のことを思い出したりして、深い喪失感や孤独感に襲われることがある。でも、こんな自分でも、潮騒にいれば腐らずに前向きに生きようとするエネルギーが湧いてくるのだ。それを支えているのは恐らく仲間が存在なのだと思う。依存症の中味は違っても、仲間は自分にとって掛け替えのない家族なのだ。騙される事も、利用されることも、値踏みされることもない。潮騒は本音で楽に生きられる世界なのだ。だから自分は潮騒で人生の“生き直し”ができています。

長く製紙工場に勤めた後、自分は造園土木関連の賃仕事を経験してきた。現場では昔風の徒弟制度はなくなっていたが、見よう見まねで仕事のやり方や機械操作を覚えた。それが仕事隊のサブリーダーとなって、便利屋的な仕事のニーズに応える際にはとても役に立っている。社会では次々に居場所を失くした自分が、就労支援活動に加わることで潮騒では必要とされる存在となった。過去の失敗が生き、自分のスキルやノウハウが求められている。世知辛い社会にいたら、恐らく自分は今頃どこかで野垂れ死にしていただろう。ともするとアルコールや薬物、ギャンブル依存症者に対し、世間は「好きでそうなったくせに」として自業自得と自己責任を声高に叫ぶ。でも、横道にそれて踏み外した人生を軌道修正できない社会より、やり直しができる社会の方が“健全”なのではないかと自分は考える。今自分は、しみじみ潮騒に繋がって本当に良かったと思っている。

(終わり)

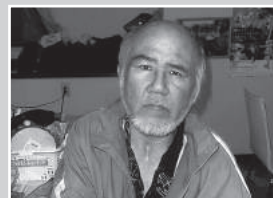
9月のバースデイ



まさお
感謝です



くろ
元氣です



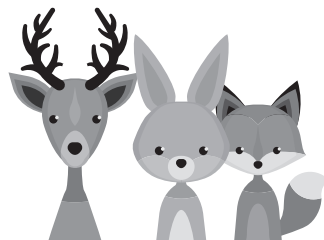
つる
五十二歳になり
ました。もう一花
咲かせます。



たろう
あっという間の
一年でした



せ
ら



9月の行事予定

- 9月2～4日 NA北海道コンベンション
 9月10・11日 JAしおさい鹿嶋農産物直売所「新米祭り」
 9月15日 潮騒俳句会
 中旬～下旬 潮騒水田での稲刈り
 9月18日 女性ハウス「るみの家」第1回家族交流会
 9月21日 社会福祉法人・すはま会 エイサー慰問
 9月22日 第7回リカバリーパレード(回復の祭典)
 9月23・24日 仙台慰問(エイサー)
 9月24日 秋元病院秋祭り
 9月25日 潮騒家族会
 栗原センター長故郷メッセージ

10月の行事予定

- 10月6日 潮騒映画会
 10月9・15日 秋元病院メッセージ
 10月13日 潮騒俳句会
 10月23日 潮騒家族会・鹿島祭り
 10月30日 潮騒アディクションセミナー
 サテライト 和太鼓・エイサー

献金・献品を頂いた方 (9月15日現在)

- | | |
|----------------|---------------|
| ・K&G 企画 様 | ・鹿島灘太鼓 島田正之 様 |
| ・市毛 様 | ・高田高義 様 |
| ・株式会社 鹿行シバウラ 様 | ・佐藤 寛 様 |
| ・岡部 様 | ・匿名希望の方々 |

今月も献金・献品をいただきました。心から感謝申し上げます。

本当にありがとうございました。

おかげさまで潮騒 JTC は、回復のためのプログラムを実践することができておりますことをご報告いたします。今後ともご支援くださいますよう、なにぞぞ宜しくお願い申し上げます。

※その他匿名の皆様からも献品・献金をいただきました。

ありがとうございました。

※発送作業簡略化のため、振込取扱票は全員の方に同封させていただいております。どうぞご理解のほどをお願いします。

編集後記という名の独り言

先月号で急死した妻の事について触れたら、これを読んだ数人の読者の方から温かい励ましの便りを頂いた。ありがとうございます。時折、生活の場面でどうしてもない悲しみが込み上げるけれど、大丈夫です ▼それにしても人生とはまならないものですね。60歳を少し過ぎて、夫婦ともにやっと人生に余裕が持てるようになり、冗談半分に「これからどう生きようか」「いっそ中古の安いキャンピングカーでも買って全国を巡ろうか」と話していた矢先、苦楽を共にした妻が亡くなるとは…。年金だって国民の義務だからと積極的に満額収めたのに、手にしたのは1年分にも満たない額だった ▼妻は終生花づくりに執念を燃やし、300坪を超える屋敷に次々と四季折々の花を咲かせて家族を和ませてくれた。農業を使わないので年中草取りに追われていたけれど、それも苦労ではなかった。でも亡くなる少し前、「あと何年花をつくれるかしら…」と死を暗示するようにつぶやいたことが忘れられない。妻亡き後、僕の力では自宅の広い花園をとて管理できない。今回は雑草が生い茂った庭の除草を、潮騒作業隊メンバーに助けてもらったけど、今後は農業も使わざるを得ないだろう ▼不思議なもので信心など微塵もなかった自分が毎朝、妻の真新しい遺影と好きだった草花を飾った仏壇に、温かいお茶と水、炊き上がったばかりのご飯を捧げ、線香をたいて独り静かに「今日も一日頑張って生きるよ」と無言で語り掛けている。これが僕の日常生活の風景として定着しつつある。たまたま仏教という信仰の形式で妻を祭ったけれど、この理屈を超えた霊的なものへの畏怖と尊厳は無視できないと思う ▼そういえば祖母や両親が自分と同じ行為を毎朝繰り返していたことを思い出す。心の平安を祈るイノセンスな行為(=精神のリレー)が他ならない自分を通し、時空を超えて連綿と受け継がれていることを自覚させられている。依存症の回復メカニズムも、こうした精神リレーの延長上にあると思う。(市)

潮騒通信 どっこい生きてます! 2016年9号

Contents

- P② 一番手強い故郷で体験メッセージができました
 P③ 今年も仲間50人がリカバリー・パレードに参加
 P④ るみの家「初の家族会」
 P⑥ ユタカ VS トム 対談 第9回
 「戦後のひもじい時代に育った社会環境がバネに」
 P⑧ 生まれ故郷で話ができ本当によかった
 栗原センター長、故郷メッセージで自分の生き様を語る
 P⑩ 受刑者からの手紙
 P⑫ しおさい俳壇「月」
 P⑭ どっこい私も生きてます「トンちゃんの回復記」第7回

■ 編集・発行：

特定非営利活動法人

潮騒ジョブトレーニングセンター(本部)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 34号

〒314-0006 茨城県鹿嶋市宮津台 210-10

TEL:0299-77-9099 FAX:0299-77-9091

潮騒リカバリーホーム(中施設)

〒314-8799 鹿嶋郵便局 私書箱 56号

〒311-2213 茨城県鹿嶋市中 2773-16

TEL:0299-69-9099 FAX:0299-69-9098

潮騒スリークオーターハウス 銚田

〒311-2113 茨城県銚田市上幡木 1113-39

E-メール k.s-darc@orange.plala.or.jp

ホームページ <http://shiosaidarc.com/>



